

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 尾中文哉

本論文は、近代社会においては社会発展の自明の前提となり、価値となっている「教育」について、「進学」という切り口から考究した比較社会学である。その地域文化において「進学」することの意味と、それを支える社会構造や人間関係を、タイ農村部の三つの村を事例とした、長期にわたる現地調査を通じて明らかにしている。

序論においては、本研究の理論的な立場について、進学促進要因の研究や教育機会の不平等論、文化的再生産の理論、トラッキング研究、カルチュラル・スタディーズなどの先行研究の理論的系譜を批判的に再検討しながら、従来の進学研究の多くが、第一に国民国家という枠組みを前提してしまっていること、第二に学校という制度の役割に重きを置きすぎ、さらに第三に文化の捉え方が必ずしも充分でなく、第四に政策論的で統計的な分析に偏っている点を、問題とする。そのなかで、「地域文化」が進学にとってもつ意味に注目し、「分厚い比較」と著者が呼ぶ質的なアプローチを採用して、タイ農村の進学現象を「開発」「宗教」「芸能」などに関わらせて論じていく、本研究の戦略性が説得的に展開されている。

以上のような問題意識に基づいて、著者は三つの特徴ある村を事例に、進学を意味づけている地域文化の構造を比較していく。第一に、北タイにおいて「複合農業」に取り組んでいる村を取り上げ、それを支えている多様なグループや団体を結ぶ役割を果たしている NGO の活動を明らかにすることを通じて、「もうひとつの発展」を支える人的ネットワークを描き出し、そこにおいて都会への「進学」よりも「村で暮らそう」という価値意識が選ばれることを明らかにしている。第二に、東北タイの「モーラム」という芸能を特徴とする村の調査から、モーラムやサラパンの活動を支える人的ネットワークや、仏教との関わりを浮かびあがらせ、さらには芸能の場それ自体の変容を論じながら、進学志向に現れてくるジェンダー差などを分析している。第三に、南部国境地帯における「ポノ」というイスラム教育機関を特徴とする村を取り上げ、その地域におけるスコラと異なる位置づけ、ポノでの学習・生活の特徴や活動を支えているネットワークについて参与観察を通じて分析している。そして、従来の文化的不平等論の説明の妥当性を再び検討しつつ、「地域文化ネットワーク」と論じてよい歴史性をもつ構造が、進学の意味を支えていることを、整理して提示している。

「開発と教育」が問題となっている社会において、進学を支えている文化の意味の厚みに迫った研究として、丹念な現地調査を積み重ね、まとめあげた力量は評価に価する。日本社会との対比は必ずしも充分とはいえないが、地域文化の多様性を押さえた比較社会学として、独自の価値をもつ。本審査委員会は、博士(社会学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。